

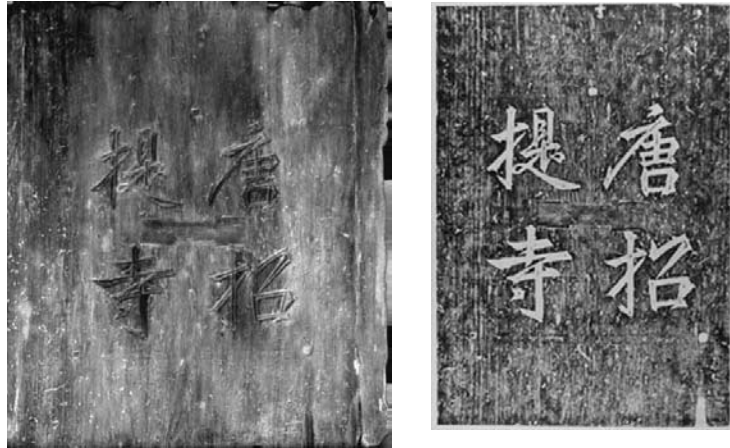
図① 唐招提寺門額



「縮小」縦68×横55cm

日本の金石文① 「唐招提寺門額」

図② 唐招提寺門額と全体拓本



集王聖教序碑

唐招提寺門額

集王聖教序碑

唐招提寺門額



図③ 「王羲之の書との比較」

今回から日本の金石文の書を紹介していきます。第一回は、金石ではありませんが、唐招提寺の門額を取り上げました。唐招提寺は、歴史上有名な唐僧・鑑真和尚によって開かれました。天平宝字三年(769年)に建立されたと伝えられています。その木製の門額(図版②)は、孝謙天皇の筆と伝承され、古代金石文の名跡とされています。昔は、門に掲げられてありましたが、現在もそのままでしょうか。門額の高さは、拓本から推測すると縦横とも130cm余りです。周囲の余白を大きく取り、その中央に大きな文字で、「唐招提寺」と刻されています。一字の大きさは、縦30cmほどの大きさです。書体は伸びやかな引き締まった行書で、王羲之の『集王聖教序』や『興福寺断碑』に近いです。これらの碑刻から同じ文字を抜き出して比較してみました(図版③)。「招」字を探せなかったため、扁と旁をもとに作字した。)まるで王羲之の書を集字して制作したのではないかと思われるくらい、似ています。当時の貴族社会では、王羲之の書が好く習われていたことを示す好例ではないでしょうか。

(注・図版①の拓本は、一行目の「唐招」二行目の「提寺」の間隔が詰められています。)

伊藤 滋 メールアドレス
mokei@galaxy.ocn.ne.jp

書道芸術院

平成の群像 (2014)



白石和楓

現代詩文書との出会い

小学5年生の冬、西千葉から東京まで一人で出かけた先が上野の東京都美術館。勿論懐かしい旧館。それ以来何十年も通うとは想像すらしていなかった。

中学卒業時に、国語の先生から高校に入學したら種谷扇舟先生の書道選択を勧められ、入学と同時に書道部に入部。飯高和子先生をはじめ錚々たる大先輩方はクラブ活動・文化祭と、おりにふれるたびに在校生を激励してくださっていた。

扇舟先生の研究室にはたくさんの法帖があり、在校生の部員は自由に古典臨書をすることができ、先輩方のすばらしい臨書作品に圧倒された新入生。特に夏休みの古典研究は文化祭の向け多種の古典をそれぞれが取り組んでいた。その中に現理事長の辻元先生もおられた。

九成宮醜泉銘から抜けきれない私はよくわからぬままひたすら臨書し、次第に他の古典も好きになり楽しい時間を過ごしていた。また、扇舟先生から「他の人がやらないうちに挑戦しよう」との課題。早速半切を縦に6枚貼り、明清時代の古典を廊下で臨書。

これにより大作大好き人間のひとりとなったことは扇舟先生のご指導の賜物と感謝している。

昭和37年頃から毎日新聞社主催で「現代詩・書展」書き下ろしの詩を書き造形した共同制作展（12名の著名な詩人と書家20名の作品展）が開催され、学生服姿で銀座松屋まで扇舟先生の出品作を拝見。これまでの漢字・かなと二つの世界に漢字とかな

の現代詩文書というジャンルの有ることを知った。この時のショックはまるで昨日のように覚えており、扇舟先生からいただいた展覧会の案内状は今でも大切に持っている。

昭和42・43年に院主催で単位認定講習会が上野東京文化会館で行われ、その講義の中で、確か國井誠海先生だったか書作品のテーマに触れ、「すきな言葉・文章など常にノートに記されている」と伺った。言葉・文章との出会い、作品にするための心構え、そしてその言葉に心を投入し、思いを表現する。私には永遠のテーマである。

冬の寒い日にとろーりとした濃墨を含ませ好きな言葉を書くこの一瞬、暑い夏の暑さを忘れ達成感を味わう別世界。院展と毎日展の二本柱に、扇舟先生はじめ諸先輩・書友に恵まれて素晴らしいご指導、アドバイス、喜びをいただきながら育てられてきたと深く感謝する毎日である。

昨年逝去なさった村山元信先生はご家族に「ていねいに生きなさい」と日ごろおっしゃられていたと聞く。この村山先生の言葉を胸に、今までご指導いただいた方々、大先輩、友人に少しでも私なりの何かお返しができるのは今しかないと思うこのごろである。

三人姉妹の中で一番字が下手であった私が、書が続けていることに一言も苦言を発しなかった母。今はひとまわりも小さくなり、テーブルで小品を書く私を黙って眺めてくれる。きっと母は心の中で「いつまでたっても上達しないなあ」と思っているに違いない。



神奈川100人展

タテ210cm×ヨコ160cm

書のひろば

理事長 辻元大雲

第67回書道芸術院展

一般公募無鑑査審査終了

昨年末に搬入された一般公募・無鑑査作品の未表装による鑑別審査が、1月11・12日両日行われ、150名余の当番審査員、審査事務員によって厳正公平に行われた。名越蒼竹審査部長の指揮は前日院幹部役員と審査部委員との綿密な打ち合わせでスタートした。

搬入数は一般公募、無鑑査ともやや微減となった。70歳以上出品料減免の効果は今回だけではわからないが、今後に期待したい。

今回は前回展とはほぼ同じ比率での入賞率を原則とした。各団体への配慮も考慮してバランスよく審査が行われ一般公募は60%の入賞、無鑑査は40%とし上位入賞数は66回展と同じとなった。当番審査員はじめ委員の皆様、とりわけ審査部のご苦勞に感謝申し上げたい。また院常務理事にはご同席頂き運営上いろいろご配慮いただいた。

今後審査会員候補・審査会員の書類搬入が今月末に、2月8日には作品搬入、特別賞選考、陳列、開会へと向かうことになっている。会員諸氏のご協力、ご支援を切にお願いしたい。

現代の書 新春展等 華やかに

新春恒例となった毎日新聞社・毎日書道会主催の「現代の書 新春展 今いきづく墨の華」は1月5日より13日まで銀座和光での31人展、東京セントラル美術館100人展とも華やかに展開された。

和光会場31人展には本院より恩地春洋毎日書道会最高顧問と辻元大雲が出品、12日にはギャラリートークを辻元大雲が司会の原田凍合氏と共に担当した。多くの観客にお出でいただき感謝。図録へのサイン会も盛況であった。

セントラル100人展へは60歳以上の審査会員より100名選抜で、別掲の通り院から14名出品、会期中席上揮毫を種谷萬城、作品解説を下谷洋子の両氏が担当した。連日多くの参観者が訪れ、新春の銀座は書一色に染まった感がある。



和光出品の2人

銀座画廊美術館では「毎日チャリティ書展」が250点余のミニ作品を展示即売、丑年生まれの会「雅誕会書展」では本院からも飯高和子氏はじめ丑年生まれが参加、銀座かねまつ画廊では「竹扇会新春東京展10周年記念 米寿小伏竹村書の世界VI」が大作中心に展開され意気盛んで元気なお姿を見せてくださった。午年は元氣よく跳ね回る年、大いに期待したい。

TOKYO書2014 公募団体の今

昨年から始まった東京都美術館の企画展「TOKYO書2014 公募団体の今」が本年も1月4日より16日まで開催された。今回本院からは種谷萬城（漢字）、坂本素雪（現代詩）、後藤大峰（篆刻・刻字）の3氏が、高さ4m、幅7mの壁面に挑戦、意気盛んなところを發揮した。

種谷萬城氏は帛書風で大画箋2枚継7連作、会場のほぼ中央、昨年千葉蒼玄氏の展示された場所に展示。坂本素雪氏は3.6m×7mの一枚張りに金剛力士と詩文書を雄大に展開。後藤大峰氏は刻字作品2点と篆刻大印2顆を出品、いずれも気迫こもる充実作であった。作品は本号に別掲されているので参照を。その他各団体の精鋭の大作は60歳代以下という若い世代だけに勢いある意欲作ぞろいであった。

この企画は今後も継続されることになっており、本院からは毎年3名の推

薦をいただいた。次回出品者は3月の理事会にて決定する予定。



都美出品の3人(右から坂本・種谷・後藤氏)

高野山金剛峰寺山口氏来院

前号でお知らせしたが高野山書道協会の母体である高野山金剛峰寺は、昨年本山執行部役員の大幅な異動が行われ、宗務総長（最高執行役員）に添田隆照師が、以前の企画室を宗務総長公室と改称、室長に山口文章師が就任された。添田師も山口師も以前企画室長、課長として高野山書道協会の事務局を担当されており、私たちには旧知の間柄である。1月20日山口文章師ら公室役員が本院を訪れてくださった。今後のご交誼をお互いをお願いしたい。

漢字 (五)

崎井恵風

かな (五)

田子白嶺

「巳」の造形

第66回書道芸術院展に出品した作品です。当り年の「巳」の古文体を題材に表現したものです。「蛇」のイメージも加味しながら躍動感ある作品に仕上げたいと思いました。一字書の造形は絵画の構成表現も参考になります。遠近・明暗等紙面の空間を効果的に生かす構成を取り入れようと努めています。マンネリにならないためにも大切な作業だと思えます。しかしいろいろ

考えている間は、作品はできません。書き込んでいる一瞬、フツと肩の力が抜け無心になれる瞬間があります。不思議なほど筆が自然に動き、書き終えた時の爽快感は何とも言葉になりません。今回の作品も最終画の筆の弾きが紙面を切り開きました。その一瞬のために今日もまた筆を走らせます。



第66回書道芸術院展「巳」(120×90cm)

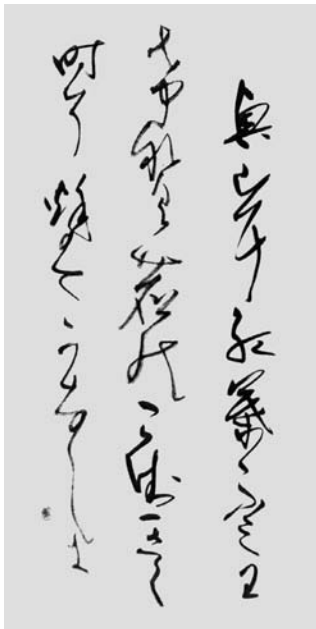
崎井恵風書

21世紀の書

—私の主張—

写真の作品は平成21年の書泉会展に出品した作品です。私にとって、この作品は手本によらず、自分で工夫して書いた初めての大字がな作品です。幾度も師の添削指導を受けて苦労して書き上げたものですが、大字がな魅力とそれを自分で工夫して作品にする楽しさ、面白さを感じ、また指導を受けるたびに少しずつ進歩しているような気がして喜びがありました。この頃から書くことに特に強い情熱をもち真剣に取り組むようになりました。この頃は、前衛書部に在籍していましたが、この2年後の平成23年に、かな部に移籍が認められ、社中展以外の毎日展、芸術院展にも出品できるようになりました。掲載作品

にはそうした思いがあります。作品は簡単には書けず、常に苦労するのですが、その難しさがまた面白さであると思うようになりました。書は皆難しいです。造形、線、流れ、濃淡、墨つぎ、余白、疎密、リズム、線の方向、全体の構成(形式)どこでどの変体があるか、文字の組み合わせ、主要部の設定、素材となる歌運び、紙、墨、また最終的に作品として仕上げるための表装のあり方等々、それぞれについて考えることが多く、計画を立て書いてみて、それを自分で添削したり組み合わせを換えたりして、師の指導を受けるまでに幾度も書いてみます。しかし自分にとって作品作りの苦労はいつも師の指導を受けた直後から始まり、これが目標に向かう一歩と思っています。



平成21年書泉会展出品作品(全紙150×75cm) 田子白嶺書

〈和光ホール31人展〉

「鶴」



恩地春洋

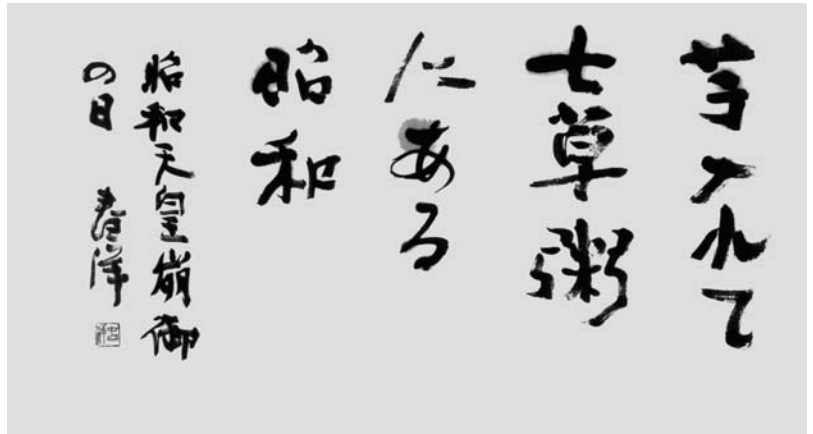
99×69cm

干支文字



「芋粥」

恩地春洋



30×55cm

現代の書新春展

今いきづく墨の華

和光ホール31人展
セントラル会場100人展

2014年1月5日(日)〜13日(月・祝)
銀座・和光本館6階
2014年1月5日(日)〜13日(月・祝)
東京セントラル美術館

主催：毎日新聞社
(一財)毎日書道会

「初詣」山口誓子



辻元大雲

120×120cm

千支文字



〈セントラル会場100人展〉

干支文字



「一星」



板垣洞仙

220×96cm

干支文字



浜谷芳仙



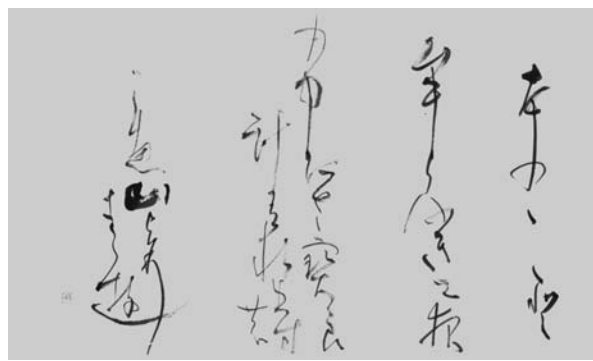
「水」

118×176cm

干支文字



石井明子



「ほのぼのと」 清水比庵

91×150cm

干支文字



「生命」



村野大仙

159×109cm

千支文字



千支文字



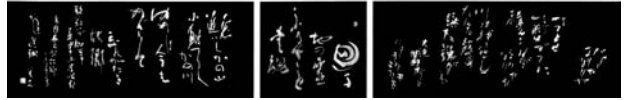
「勁」



香川倫子

180×121cm

飯高和子



「廻る 一地の靈ふるさと書魂一」

民謡「ソーラン節」「大漁節」、高野辰之「故郷」

上 69×70cm

下右 28×70cm

下中 28×30cm

下左 28×70cm

千支文字



小竹石雲

「鶴太夫」赤木格堂

138×140cm

千支文字



大野祥雲



「駒」

128×181cm

千支文字



「狼屋(シリウス)を」宮沢賢治



下谷洋子

140×52cm×2

千支文字



種谷萬城



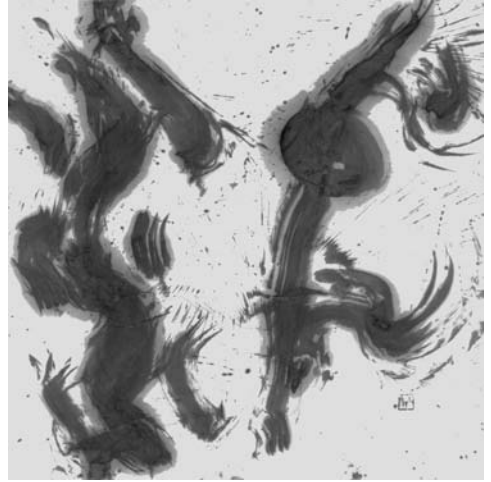
「張説詩醉中作」

110×171cm

千支文字



小伏小扇



「沖」

120×120cm

千支文字



砂本杏花



「長谷川権の句「雪舞ひ」」
句集『初雁』

159×97cm

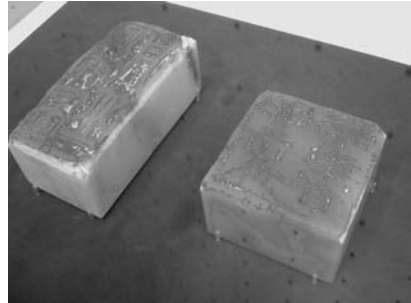


TOKYO 書 2014 公募団体の今

<日 時>
平成26年 1月 4日(土)~16日(木)
<場 所>
東京都美術館 (上野公園)
公募展示室 ロビー階第1・第2
<主 催>
東京都美術館
(公益財団法人東京都歴史文化財団)



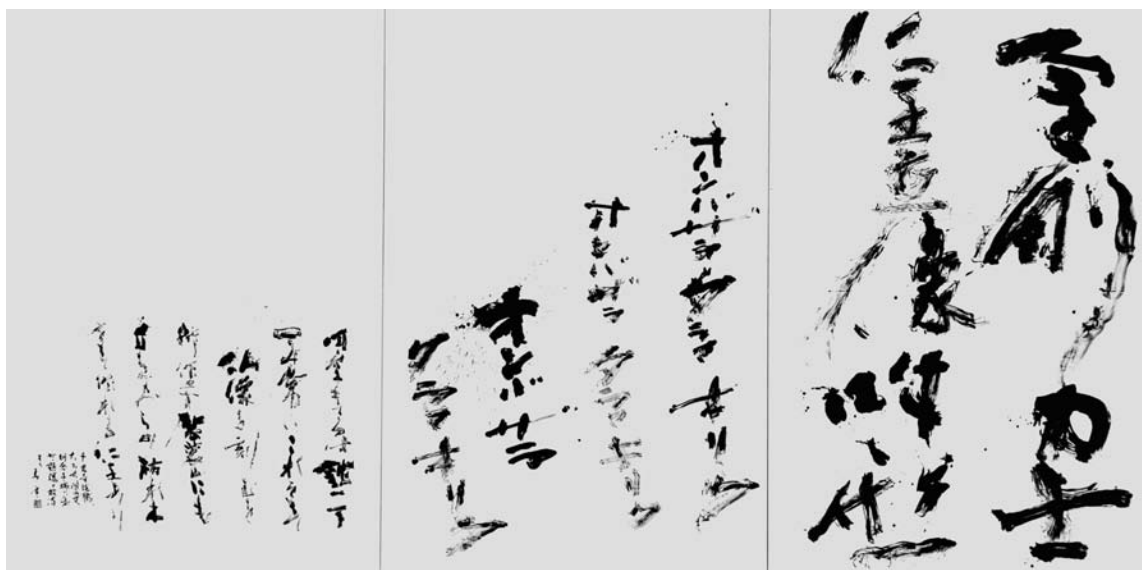
後藤大峰 「即是秋空舞海」



後藤大峰 「坐有琴書」「傳成石室丹丘」



後藤大峰 「心無物欲」



坂本素雪 「円空」



種谷萬城 「西門行」



須田瑞兆
(千葉)

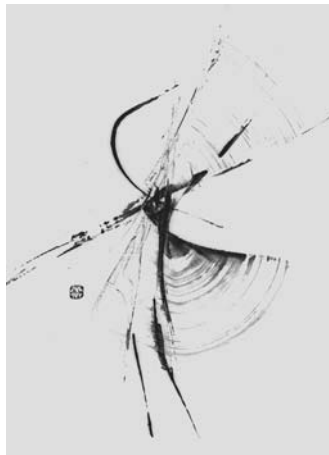


石下珠光
(青森)

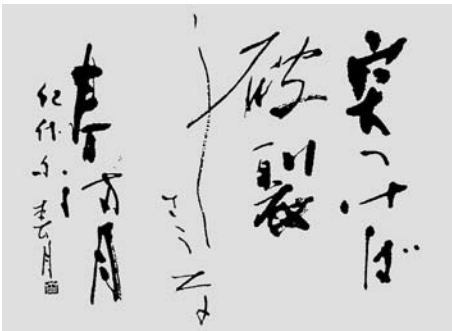
「山のしづけさは白い花」
種田山頭火の句
山頭火の見た山、木々そして花は白
根莖それとスミレでしょうか。
裾野が左右にゆったりと広がる「む
つ」の山、釜臥山と、花の中に大自然
を感じ黙々と旅を続けたであろう山頭
火を重ね、一気に書いてみました。
これからも試行錯誤しながら精進し
ていきたいと思っています。
(珠光)

「劉長卿詩」

五言絶句を行草の単体で書
いてみました。漢詩の流れを
大切にしながらの創作は力量
不足が悩みですが種谷萬城先
生にご指導いただく古典臨書
は心落ち着く良い時間です。
今は鍾繇と米芾を鑑としてい
ます。素朴さとお洒落な字形
がいつか作品に生かされるよ
う精進致します。
(瑞兆)



後藤 歩
(宮城)



千田春月
(岡山)

「書は対話…」常々感じて
いることです。書き手として、
表現者として、用具用材を吟
味することからスタートです。
掲載されている作品は極端な
例ですが、筆ではなく厚紙の
切れ端を使って書いたもので
す。用具用材の工夫で新たな
表現が生まれ、書との対話に
つながっていくものと思いま
す。
(歩)

「突っけば破裂しさうな春満月」

繪 紀代

今回の作品は線の強さと余白の美し
さを心掛けて書きました。思い通りに
表現することは難しいですが、心に響
いた言葉を大切にし書作に励みたいと
思います。小竹石雲先生はじめ諸先生
方のご指導に感謝しつつ精進して参り
ます。
(春月)



坪田鉄修
(長野)

「鳥聲春」
のどかな鳥の鳴き声に春を感じる。

この度は審査会員にご推挙いただき感慨無量です。ひとえに先生の熱心なご指導を深く感謝申し上げます。書を持つ線の美しさを板に力強く表現し、なお一層研鑽精進を重ねて参ります。よろしくお願ひ申し上げます。
(鉄修)



西岡悦子
(富山)

「明」

古典を学びとり感動を前衛書に託した。試行錯誤を繰り返して得た成果を、深みある鋭い線・余白の美で躍動的な作を望んだ。

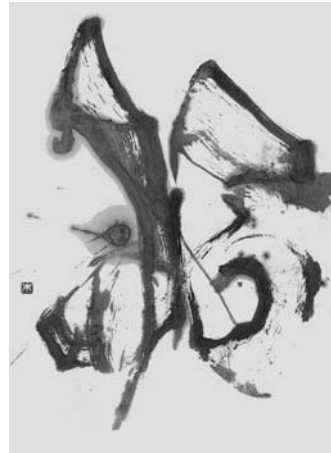
幸い、良き師と仲間恵まれたことに深く感謝し、心新たに書の道に邁進したいと念じている。
(悦子)



中塩朱華
(宮城)

「瞬間」

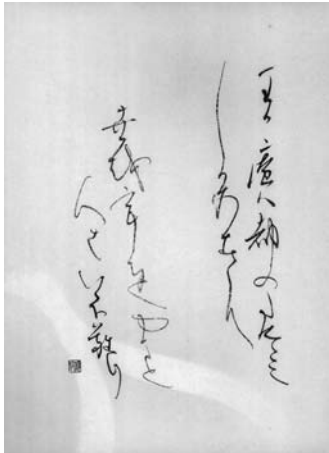
大きな筆に墨をたっぷり付け紙に思いのまま筆を動かして30年、師から学んだ甲骨文字と古典の融合を表現してきました。沢山の人の支えられ続ける事が出来ました。今後も墨の変化を楽しみながら生きていく事の支えにしていきたいと思っておりますので皆様、御指導よろしくお願ひ致します。
(朱華)



山田静枝
(群馬)

「わが庵は都のたつみしかぞすむ世をうぢ山と人はいふなり」 百人一首

この度「第66回書道芸術院展」におきまして準大賞受賞という身に余る重みに恐縮しております。これも故下谷東雲先生と、現在は洋子先生の優しく時に厳しく御指導下さいましたお陰と感謝致しております。また、書道芸術院という恵まれた環境があったからこそと感謝申し上げます。
(静枝)



風信帖(空海) ②

漢字研究部臨書課題

Ⅱ (半紙普通判・縦使用) 左記の法帖より何文字臨書してもよい。

特別研究部臨書課題

Ⅱ (毎日展公募サイズ以内・縦横自由) 左記の掲載以外も可。

〔解説〕 風信帖は弘法大師筆の尺牘。空海が最澄に送った書状3通を1巻にまとめたもので、1通目の書き出し

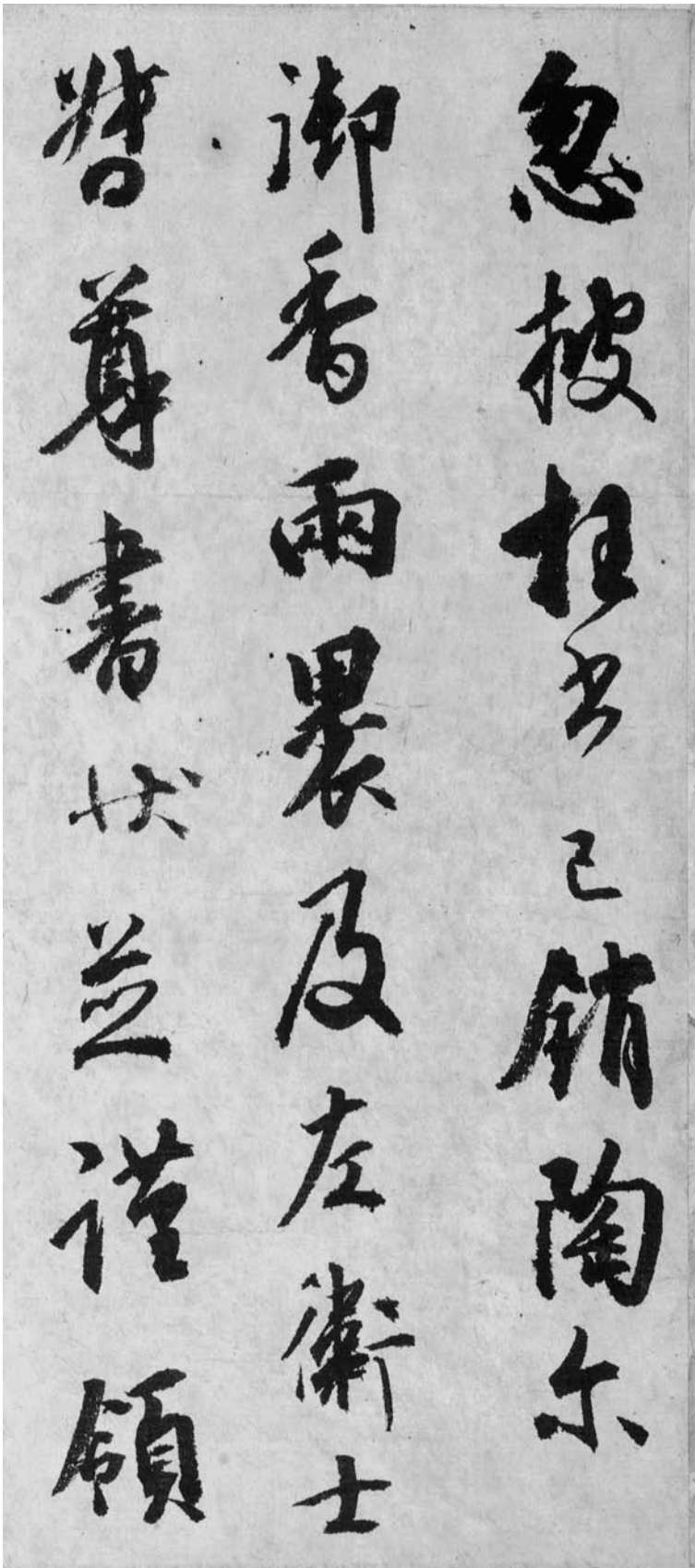
「風信雲書…」の句に因んで風信帖と呼ばれる。もとは5通あったようだが、1通は盗まれ、1通は豊臣秀次の

所望により、天正20年(1592年)献上したことが巻末の奥書に記されている。現存の3通は、いずれも行草体で率意の書。空海の書として灌頂歴名とともに絶品とされる。

(編集部)

※落款を必ず入れる

署名、もしくは○○臨
(押印のみも可)



(78%縮小)

忽披枉書、已銷陶尔。／御香兩裹、及左衛士／督尊書状、並謹領

古筆鑑賞

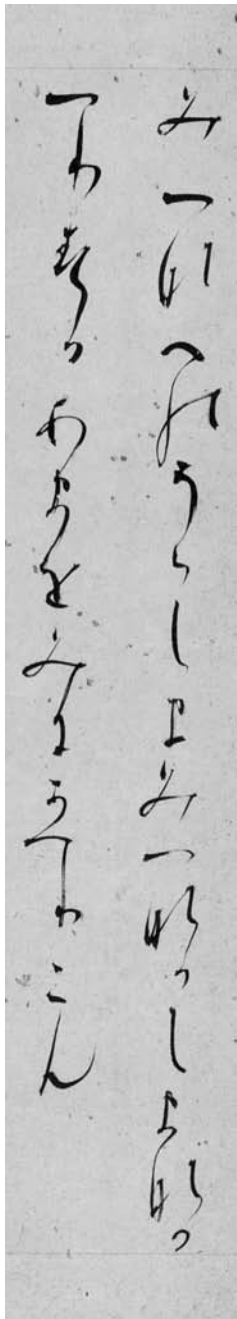
119

藍紙本万葉集
(伝藤原公任)

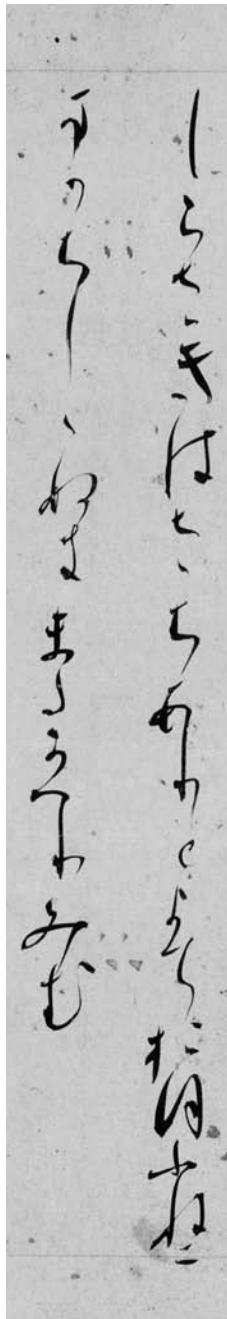
②

〈よみ〉
いもがためわれたまもとむおきつなる
しらたまよせよおきつしらなみ

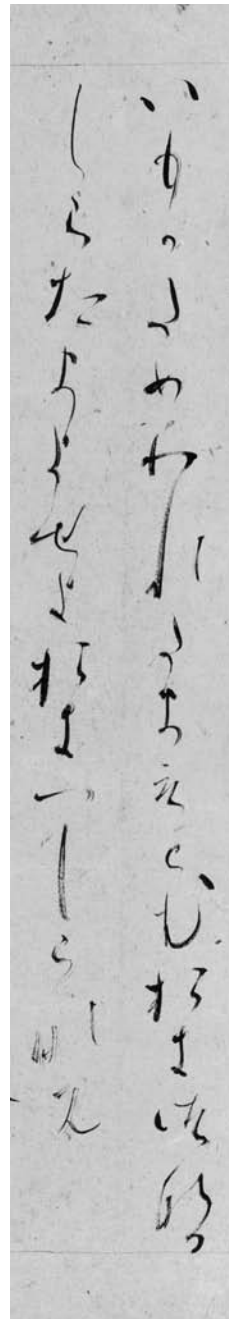
しらすきはさちありとまておほふねに
まかちしぬきまたかへりみむ
みつなべのうらしまみつなかしまなる
つりするあまをみにかへりこむ



(70%縮小)



(70%縮小)



(70%縮小)

かな研究部臨書課題

- ・競書作品は、左の古筆の掲載部分より歌一首以上を書く。(全臨可)
- ・用紙は半紙普通判(料紙可)
〈たて長に使用〉
別紙を裁断して貼付も可。
半懐紙は半紙サイズに切って使用のこと。

特別研究部臨書課題

- ・毎日展公募サイズ以内・縦横自由
- ・左記の掲載以外も可

※落款を必ず入れる
署名、もしくは
〇〇臨
(押印のみも可)

〈解説〉

筆者とされる藤原伊房は、平安時代最も偉大な能書家と言われた藤原行成の孫にあたり、元服(10歳)を経て、16歳の侍従(後朱雀天皇に近侍)から官吏としての人生を始めた。

伊房の性格を物語る逸話はいくつかあるが、その1つ。應徳3年(1086)9月16日、藤原通俊は後白河天皇の勅命による『後拾遺和歌集』を完成させ、その清書を伊房に頼んだ。それを見た伊房は、自分の歌が1首しか入集していないのに腹を立て、勝手に2首を書き加えたという。これは直ちに見つかってしまったが、この天衣無縫とも言える率直さが、晩年になり、それまでの順風満帆の人生が暗転することになった。

書風はこの伊房の性格を物語るように、個性的な歯切れ良さとエネルギー感に迫力に満ちみちている。気宇雄大な筆致は太細の変化も著しく、弾力的なリズムで力強くスピード感にあふれて運ばれてゆく。優麗で典雅と言うべき平安の古筆の中でも、ひと際異彩を放つたくましさの魅力とされる。(編集部)

※1月号〈解説〉に誤りがありました。

佐々木信綱↓(佐佐木信綱)

訂正してお詫び申し上げます。

漢字規定 初段以上 【三月十五日締めきり】 用紙 半紙普通判

大野祥雲 選書



萬法無生

よみ (萬法無生)

書体 自由

習い方解説 (五)

大野祥雲

萬法無生 (萬法無生) (臨濟録)

「すべての存在は、自分ひとりで生まれてきたのではない、という真実。万有はそれ自身として単独に生ずるものではなく、みな縁起によって生じたものである。」これは唐の禅僧・臨済のことばです。

「萬」筆圧の変化と結体上の密と疎を一応考えて運筆。終画を中心に左右に余白をとって明るく。「法」偏と旁の間を十分あける。旁の転折が固くならないように用筆に注意した。

「無」並んだ3本の横画とれっか、それに4本の縦画をそれぞれ横画のように書く。繋ぐ斜画で安定。

「生」起筆を軽くし、横画から縦画へ、途中で結び、次の縦画が斜画のようになったが、最後の横画でバランスよくまとめる。

漢字規定 秀級以下 【三月十五日締めきり】 用紙 半紙普通判

名越蒼竹選書

動 致 重 力
福 徳

蒼竹

動 徳 致 福

よみ (徳を動かし福を致す)

書体 楷書

習い方解説 (五)

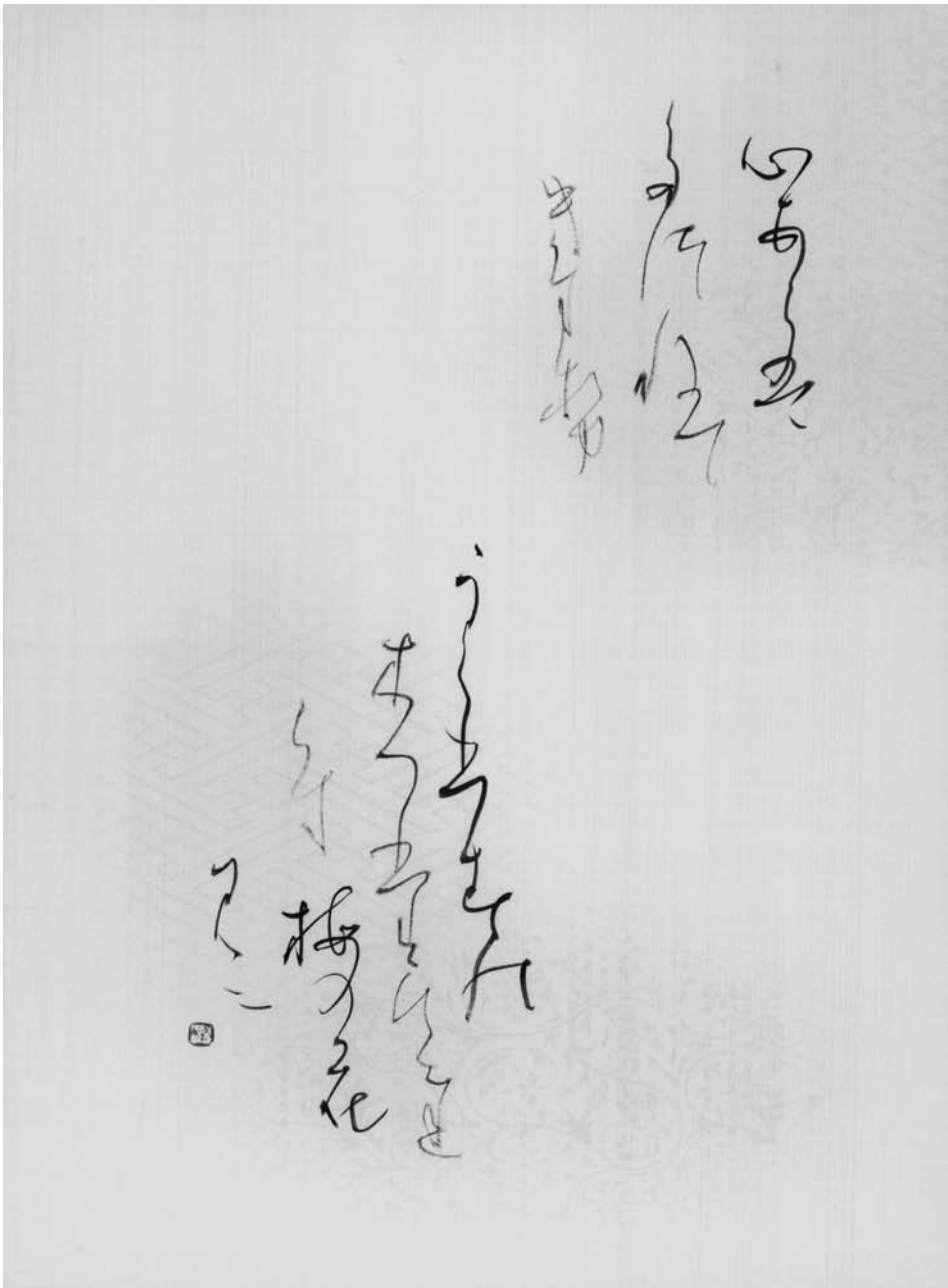
名越蒼竹

動徳致福 (徳を動かし福を致す) (論衡)

先月は円筆の練習をしました。そこで今月は最も円筆らしい書として顔真卿の書風を取り上げることになりました。顔真卿の楷書は活字の明朝体のモデルとされたと言われています。横画は細めで縦画は太く書かれています。字形は向勢で丸みがあり、懐が広いのが特徴です。しかし顔法が一番の特徴は起筆と収筆です。ここでは筆を立てて穂先のバネを利かせています。筆を寝かせて太さを出した線は圧力を感じませんが、筆を突き立てて太さを出すと線に厚みが表現できます。独特のハネとハライのやり方はここでは説明しきれません。いろいろ工夫してみてください。

かな規定 初段以上 【三月十五日締めきり】 用紙 半紙普通判(料紙可)

平川峰子選書



習い方解説 (五)

平川峰子

心あらばたづねて来ませ驚の
木づたひちらす梅の花見に

(良寛)

今月は散らし方を大胆に2つに分けた布置にしてみました。右上は丸を意識、左下は頂点が左の三角形に。

墨継ぎは「う」と「梅」にしてみました、もし「梅の花」を渴筆でもう少し大きく書いた場合は「見」で墨継ぎすると良いでしょう。要は、墨継ぎすることによって紙面に変化を与え、美しさを作り出すようにすれば良いのです。どこで墨継ぎすれば良いかを考えることは重要で、特別的意図がある場合を除いては継ぐ場所が左右の行で並ばない方が良いでしょう。墨継ぎの回数は多すぎると騒がしくなったり重い感じになります。なるべく回数を少なくする方が濃淡の差はつきり出て美しくなると思います。

よみ方

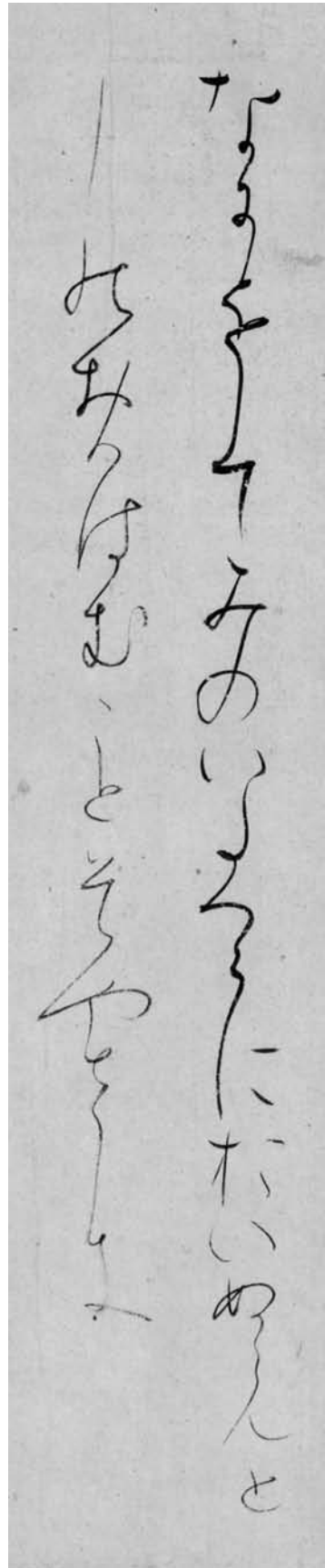
心あらば(盤)た(多)づ(徒)ねてき(幾)ま(万)せ(勢)うぐ(久)ひ(悲)す(春)の(能)
木づた(堂)ひち(連)らす(寸)梅の花見に(二)

創作

かな規定 秀級以下 【三月十五日締めきり】 用紙 半紙タテ1½ (料紙可) (たて32センチ・よこ12センチ)

掲載写真のうたを全臨、または部分(二字以上の連綿)を臨書する。

高野 切第三種
(掲載写真縮小93%)

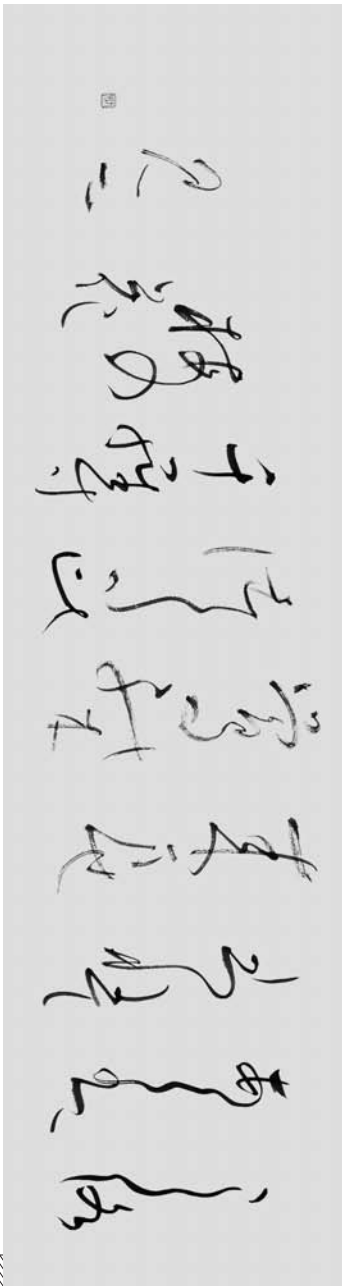


よみ方 なに(尔)をしてみのいた(多)づらにお(於)いぬらんと

しの(能)お(无)はむことぞやさしき(支)

かな条幅規定 【三月十五日締めきり】 用紙 小画仙紙半切 (料紙可)

和氣しげ代選書



よみ方

ここ(し)ろ(路)あらば(盤)た(多)づねて来(万)せ(鶯)の(能)
木(徒)た(多)ひ(比)ち(千)ら(羅)す(寸)梅の花見に(二)

創作

出品券
貼付位置

習い方解説 (二)

和氣しげ代

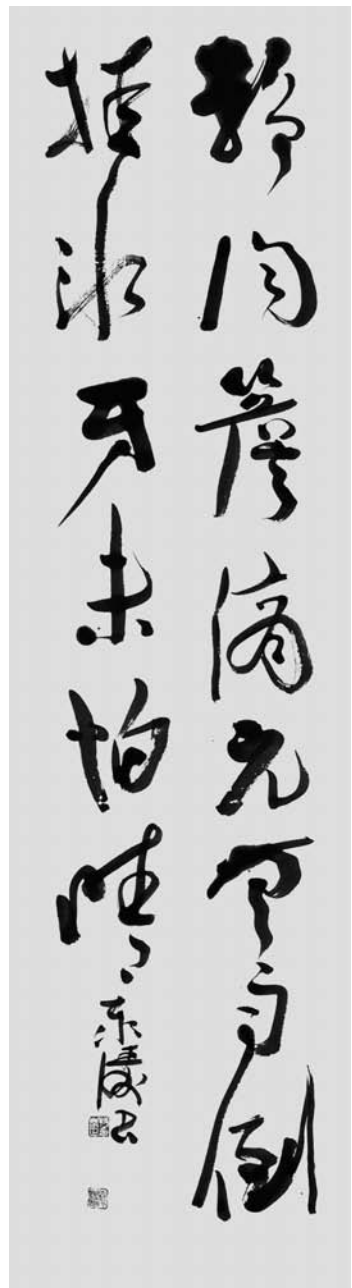
心あらばたづねて来ませ鶯の
木(つ)たひちらす梅の花見に
(良寛)

歌意 お気持ちが動きましたらおた
ずねください。鶯が木々を伝って
花を散らすわが庭の梅見に。
「たづねる」の「づ」は原文通り
のかな使いにします。穏やかに書
き出し「行目」鶯は渴筆でゆっ
くりと「梅の花見に」で動きを出
します。

※よこ形式に限る

漢字条幅規定 初段以上 【三月十五日締めきり】 用紙 小画仙紙半切

牧 泰濤 選書



静聞簾滴元無雨 倒挂氷牙未怕晴
(静かに簾滴を聞くも元雨無く、倒まに氷牙を掛けて未だ晴を怕れず。)

書体||自由

漢字条幅規定 秀級以下 【三月十五日締めきり】 用紙 小画仙紙半切

竹本龍汀 選書



今年花落顔色改 明年花開復誰在
(今年花落ちて顔色改まり明年開くも復た誰かある)

(劉廷芝)

書体||自由

習い方解説 (五)

牧 泰濤

薄墨もまた効果あり
今月は薄墨で肉太の単体中心に書した。2ヶ所連綿あるが字々間の気脈を保つことが大切。
「筆性墨情は、皆其の人の性情を以って本と為す」(清・劉熙載)。
筆も墨も用いる人の心の働き、感性が本であるということ。一本の筆の万態を自分なりに見つけ、墨色も自分の色を見つけることを試みて下さい。

習い方解説 (五)

竹本 龍汀

今回は7字句2行書です。2行書の作品で背勢と向勢の文字の配置、字間の変化による筆致のリズムを学んでみましょう。「今」の下、「季花」の下、「顔」の下、「年花」の下、「開」の下の空き、「季」と花の間、「復」と「誰」の間等々の字間、ふっくら丸い向勢、反った字形の背勢の文字によるメリハリに注意して書いてみて下さい。

習い方解説 (五)

三浦鄭街

董其昌につづく王鐸・黄道周・倪元璐・
張瑞図・傅山らの明末清初の能書家
たちの作風は、作者自身の情念に直
結したような一種犯しがたい威力を
感じさせる点に特色がある。○○書

用紙Ⅱはがきの大きさ、白色のもの、黒インク使用のこと

書体Ⅱ自由

明末清初の書道史を題材にしました。
ここ数ヶ月長文ですが、今月までお付
き合いください。ペン字で一字一字を
丁寧を書く事は勿論ですが、余白と全
体のバランスを意識する事は書作品制
作と同様にとても大切に思います。

明○董其昌(1555—1636)「芸術百世の師」
と評される大書画家。○張瑞図(1570—
1640)行書詩軸(重厚な筆力に満ちた奇
逸の書)○黄道周(1585—1646)草書五言
律詩軸(右肩上がりの筆法を駆使した
行草作は極めて個性的)○王鐸(1592—
1652)臨王庭筠行書軸(長条幅を見事に
生かした連綿の傑作)○倪元璐(1593—
1644)行書詩軸(明末清初の「異態」)
○傅山(1607—1684)書孟浩然詩卷(豪
放な精神性)

芸術新聞社発行『図説 中国書道
史』書道史概説より抜粋

※落款を必ず入れる。

(自分の名前を入れること)

ホープ作品 各部総評

NO. 632

ペン字部 師範 田子 恵琉

伸々とした筆致、余裕のある書き方でリズム感あふれる作。多字数でありながら品よくまとめた。
◎ペン字部総評 画数の多い文字が多かったせいも、少し息苦しさを感じさせる作品が多かった。行間の配置に一考を要す。(蒼玄評)

顔真卿の作品で現在知られるものには楷書碑が多く、それぞれに特徴があり「一碑一面貌」と評される。行草書では「争坐位稿」「祭侄文稿」「祭伯文稿」の三稿が有名である。 恵琉書

かな条幅部 師範 松田ち代子

無理のない運筆が美しい流れを創り、控えめの線が効果的です。俳人名があると更に華やかか？
◎かな条幅部総評 全般に誤字も少なく趣のあるものが多かった。墨色の汚さは品性をなくすので墨はすって使うこと。(明子評)



前衛書部 特選 荒川 空華

躍動感あふれる粘り強い線、余白をとりながらの構成は響きと大胆さがあり、見事な作である。
◎前衛書部総評 新年の干支「馬」をモチーフとした作品もあり、意気込みが伝わる。(光昭評)



漢字条幅部 師範 森下 祥泉

おだやかな雰囲気の流れ表現。柔らかな筆致の濁筆が効果的で、自然で無理のない作品です。

現代詩文書部 特選 吉川 素香

腹の据わった字形、筆運びで坦々と無理なく書かれ安定感があり、墨色美しく情趣豊かな作。
◎現代詩文書部総評 ただ書くだけでなく、言葉、文字、線を大切に扱って書作しよう。(石雲評)



◎漢字条幅部総評 上級者多様な表現が多く好感が持てる。草書表現にやや難ある作散見。字典の活用と字形の研究を。(大雲評)

漢字部 師範 吉川 素香

鄭道昭摩崖の風格を見事に表現した。深い味わいの線、懐の広い安定感ある結構など申し分ない。
◎漢字部総評 上位の作品は、古典の学習を基礎とした創作で、様々な書体、書風があり、楽しく審査した。誤字に注意。(萬城評)



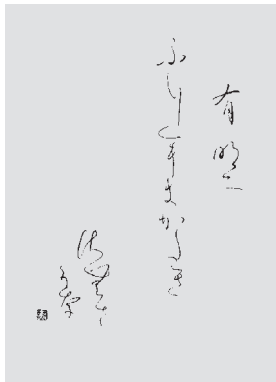
かな部 師範 江田 茂夫

墨の変化や印の位置など一考したいが、書き出しの柔和な表情、気脈やリズムの確かさが見事です。
◎かな部総評 字数の少ない俳句にしては細く小さくまとめた作が多く残念。臨書と同じ筆ではないですか？是非料紙を。(洋子評)



◎かな部 師範 松田ち代子

無理のない運筆が美しい流れを創り、控えめの線が効果的です。俳人名があると更に華やかか？
◎かな条幅部総評 全般に誤字も少なく趣のあるものが多かった。墨色の汚さは品性をなくすので墨はすって使うこと。(明子評)



今月の

特別研究部優秀作品(特選)

漢字

(千葉) 松村秀扇 「山居」



175×58cm

松村秀扇書

◆筆を自由自在に活躍させ紙面に巧みな息吹きを与え見せてくれる。渴筆の動きも躍動感を充分に表現。

(倫子評)

◆五言一句十文字を大胆に二行展開。潤濁の変化もバランスよく、意欲的な作。渴筆部やや走りすぎか。

(大雲評)

◆力強い線で空間を圧して見事な作である。最後の「聲」の回転部分だけが浮いてしまったのは惜しい。

(蒼玄評)

◆一見、荒さを感じさせる勢いは、字形の確かさと相俟って力強く訴えてきます。見応え十分の快作。

(明子評)

現代詩文書

(もく) 西川藤象 「杉田久女の句」



180×32cm

西川藤象書

◆やや細身の長幅に俳句一行はしっとりと似つかわしい。二本組の破筆が効果的でさわやかな作。

(大雲評)

◆新春に相応しい選句がよい。緩急、潤濁の美しい筆は、高い境地です。久女が微笑んでいますね。

(明子評)

◆口ずさむ様な筆の動き、ここぞと思う所で太く、かすれた紙面に唱う響きを聞かせてくれる楽しい作品。

(倫子評)

◆歯切れ良い独自の線の間を裂いて見事である。上部の動きのある造形に對し後半は均等になったか。

(蒼玄評)



50×168cm

野口加奈書

前衛書

(四谷) 野口加奈 「銀世界」

◆込めた思いは銀世界。文字を追っている者には、創作への衝動がさまざまに想像されて楽しい作です。

(明子評)

◆二層紙の厚味を生かし、柔らかな中に重量感を見せて広がりある作。心安らぐ味わいある作品。

(大雲評)

◆墨色に変化をつけて次へ次へと筆を動かして行く。全体に淀みのない紙面造りができて楽しい作品。

(倫子評)

◆島を思わせる固まりの造形で重厚な線でもとめあげた。墨色の変化が左右で同じだったのはどうか。

(蒼玄評)

現代詩文書 (大雲)

長島僊雨 「草野心平の詩」



67×145cm

◆にじみの美しさに引きつけられる。長鋒を駆使した、うるさい線を余白でバランスをとり見事です。(明子評)

◆茶淡墨のにじみと渴筆を生かし、柔らかな線質がリズムを奏でる。同一文字の類似が惜しかった。(大雲評)

◆墨色が草野心平の詩文によくあい、流れが美しく表現されている。線質に割れた部分に一考を。(倫子評)

◆墨のにじみと渴筆をうまく配置し広がりのある作品となった。最後の名前の一行は少々空間がほしい。(蒼玄評)

漢字 (もく) 森田藤谷 「五言二句」



170×48cm

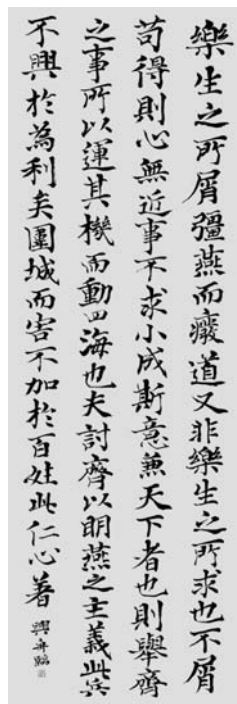
森田藤谷書

◆やや粗さが眼につくが、通貫するリズムが爽快で動きある作。二行目下部やや気が抜けたか。(大雲評)

◆有り余る表現力と技術力をつきつけられて戦う思いです。見る側に緊張感を求める天晴な作です。(明子評)

臨書 (大雲)

江本興舟 「光明皇后樂毅論」



180×60cm

江本興舟臨

◆光明皇后の臨としては少々上品過ぎるが、最後まで一貫したリズムでまとめた。筆の回転のバネがほしい。(蒼玄評)

◆光明樂毅の動きと変化をよく捉え、王羲之の原本の柔らかな暢びやかさを見せている。丁寧な臨書作。(大雲評)

◆揺るぎない臨書の魅力を満喫しました。線の伸びやかさは、作家の精神の置き所の良さと感じます。(明子評)

◆力強く表現されている。この強さは習うのには大変なことだが、沈着な筆法でよくまとめた書かれている。(倫子評)

◆直と曲を交互に使い作品作りの的を射ている。固めの筆が線の開閉もしっかりとした快作である。(蒼玄評)

◆力を筆全体にこめて紙に食い込む様な強さを表現。その中に次の字へ移る流れが自然に出てくる。(倫子評)

創作の部(49点)

漢字 11点

かな 1点

現代 21点

篆刻 1点

前衛 15点

臨書の部(25点)

漢字 20点

かな 5点

総出品点数 74点

〈特選候補者〉

〔創作の部〕

〔漢字〕

AI 清水由紀子

千葉 竹浪 叙舟

樹原 紺野 遊山

〔現代詩〕

游水 荒川 空華

佑希 田中 梢翠

大雲 阿部 恵泉

〔篆刻〕

東総 平野 草堂

〔前衛〕

玄象 大鹿 洋江

蓮紅 浅野 彩紅

蓮紅 田村 紅紗

〔臨書の部〕

〔漢字〕

英峰 渡邊 多佳

英峰 佐藤 桂香

大雲 小川 白舟

〔かな〕

安波 鈴木 英晴

大雲 佐藤 希雲

漢字研究部
(案毅論)

選評 大野祥雲

今月のホープ作品

樂生之所屑強燕而癡道又非樂生之所求也
也不屑苟得則心無近事不求小成斯意激
天下者也則舉齊之事所以運其機而動四
海也夫討齊以明燕之主義此兵不興於焉
利矣圍城而害不加於百姓此仁心著於遐
由美子臨

澁谷由美子

漢字研究部 特選 澁谷由美子

課題を全臨し文字は細いが、始筆、終筆、
転折、気脈の貫通など見事です。横画の始筆
を見ても、スツと軽い調子のもの。鋭く切り
込んだもの。逆筆が入ったものなど、細部ま
で観察し、表現出来る高い技法、素晴らしい。

◎漢字研究部総評

今月の作品を見せていただいた。①文字の
概形(扁平、縦長、四角、偏と旁の関係)。

②横画、縦画の太細。③払いの長短。④造形
の疎密。こうした基本的なことを掴むことか
ら始めてほしい方が多いです。なお、この概
形を学ぶだけが臨書ではありません。特に光
明皇后の臨本からは、いき生きた躍動感あふ
れる書を学ぶこととなります。上位の方は形・
意ともにより学書をされています。今回も
「求」の「、」の無い方が沢山いました。

樂生之所屑
翠江臨

非樂生之所求
光祥臨

樂生之所屑強
祥園臨

強燕而癡道
颯雲臨

樂生之所求
寛子臨

海也夫討
初寛臨

初寛颯祥光翠
香子雪園燁江

心得則無
雅悠臨

事不求小成斯
小成臨

事不求小成斯
信子臨

樂生之所求
初信臨

其機而動
初信臨

心得則無
初信臨

初静幸信夕雅
江城子子子悠

苟得則心無近
順一臨

則心無近事不
近事臨

利矣圍城而害
幽香臨

則心無明燕之
澄仙臨

主義
和夏臨

利矣圍城而害
豐作臨

豐和澄幽阜順
作夏仙香月一

利矣圍城而害
真智子臨

者也則舉齊之
智子臨

樂生之所屑強燕而癡道又非樂生之所求也
也不屑苟得則心無近事不求小成斯意激
天下者也則舉齊之事所以運其機而動四
海也夫討齊以明燕之主義此兵不興於焉
利矣圍城而害不加於百姓此仁心著於遐
友香里臨

則心無利矣圍
智子臨

利矣圍城而害
友香里臨

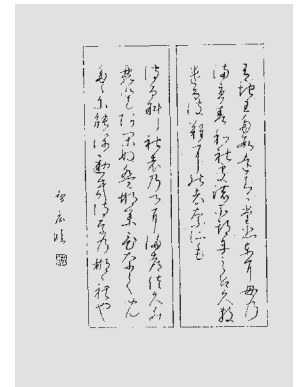
利矣圍城而害
友香里臨

蒼淑佑友智真
風子子里子子

かな研究部
(高野切第三種)

選評 勝山初美

今月のホープ作品



鈴木智広

草がなを正確に理解した上で、自然な気脈で筆が運ばれています。品の良い落着と緻密さ、線の太細墨の濃淡も美しく格調高い作品となりました。
◎かな研究部総評
草がなで書かれたこの部分は他の部分のかならしいかなとは異なりますが、文字を切っても続けても滑らかな流れとリズムカルな運筆を心掛けましょう。



玉潤寿
華子子

典嘉紅
子江霞

優良佳
子泉子

美洋清
雪子耀

かな研究部成績表

特選		秀水		英峰		正阪		誠和		華大		善泉	
電こA 泉こI	澄秀石 明明留	彩大N 阪日川	玉奥澄 川春松	前うま 橋る	や生電 泉張大	幕治A 張田高	鬼清玉 高月松	蘭電カ 泉鼎泉	た後藤 か佳代	蓮有本 か美智	大紅鈴 秋貝木	紅雲美 雪清耀	大紅雲 雪清耀
加藤加 藤藤	岩嶺池 崎崎飼	岸田金 田藤野	伊野中 川川	小田川 川川	飯高東 山山	飯高東 山山	飯高東 山山	飯高東 山山	飯高東 山山	飯高東 山山	飯高東 山山	飯高東 山山	飯高東 山山
龍翠陽 恵美子	由洋道 美園子	東萩良 祐喜風	東美佑 子美風	東美佑 子美風	東美佑 子美風	東美佑 子美風	東美佑 子美風	東美佑 子美風	東美佑 子美風	東美佑 子美風	東美佑 子美風	東美佑 子美風	東美佑 子美風
もく佳 作(60名)	京東清 橋実扇	祥華華 紫祥仙	華華華 紫祥仙	華華華 紫祥仙	華華華 紫祥仙	華華華 紫祥仙	華華華 紫祥仙	華華華 紫祥仙	華華華 紫祥仙	華華華 紫祥仙	華華華 紫祥仙	華華華 紫祥仙	華華華 紫祥仙
青木 藤連	吉吉大 田田和	山山山 崎崎崎	山山山 崎崎崎	山山山 崎崎崎	山山山 崎崎崎	山山山 崎崎崎	山山山 崎崎崎	山山山 崎崎崎	山山山 崎崎崎	山山山 崎崎崎	山山山 崎崎崎	山山山 崎崎崎	山山山 崎崎崎
澄松正高 春村華入	I昌上 S宛泉	菊玉千 川葉木	前麗高 橋澤崎	高正上 珠華泉	白正上 精大月	立生香 精大月	香麗A 緑大月	千玉昌 葉松苑	正昌昌 苑松苑	正昌昌 苑松苑	正昌昌 苑松苑	正昌昌 苑松苑	正昌昌 苑松苑
阿阿青 天塚木 久澤隆 洗華子	六本木 木弘	森縣田 崎令博	宮崎妃 菜翠幸	松淡重 翠翠幸	堀長川 幸信翠	根永井 飛裕惠	西井尾 飛裕惠	中野村 春香華	田村由 春香華	鈴志水 由起華	清波澤 美初華	淡波澤 美初華	佐藤藤 初華
若生澄 春華仙	高澄や 大樹高	飯高壽 崎高書	近藤重 藤藤松	小峰美 雅登雅	小峰美 雅登雅	小峰美 雅登雅	小峰美 雅登雅	小峰美 雅登雅	小峰美 雅登雅	小峰美 雅登雅	小峰美 雅登雅	小峰美 雅登雅	小峰美 雅登雅
菅新新 沢行司	篠鹿佐 谷井藤	酒藤齋 藤藤松	近藤重 藤藤松	小峰美 雅登雅	小峰美 雅登雅	小峰美 雅登雅	小峰美 雅登雅	小峰美 雅登雅	小峰美 雅登雅	小峰美 雅登雅	小峰美 雅登雅	小峰美 雅登雅	小峰美 雅登雅
選外 203名氏名略	如月 ふみ	竹風蓮 風紅布	蓮風蓮 風紅布	蓮風蓮 風紅布	蓮風蓮 風紅布	蓮風蓮 風紅布	蓮風蓮 風紅布	蓮風蓮 風紅布	蓮風蓮 風紅布	蓮風蓮 風紅布	蓮風蓮 風紅布	蓮風蓮 風紅布	蓮風蓮 風紅布

かな研究部 特選 鈴木 智広